

巻頭言 「荒れ野の旅」

宇野 元

イスラム教のラマダーン月の朝、人気のないスエズの町から、小型の貸切バスに乗って出発。宿で用意してもらった種なしパンのお弁当と、ミネラルウォーターを持参して。運転手は生の人参を鉛筆の束のようにコップに挿していた。荒れ野の旅がはじまった。国境が鉄条網で囲われていたのを思い出す。現代の荒れ野には、自動小銃をさげた兵士たちの姿がある。

夜中のうちに起きて、シナイ山を登った。巨大な岩の塊が大地にごろりと置かれているようだった。拳のようにも見えた。下山したのは明るい午前だった。麓に、6世紀に建てられた聖カタリナ修道院がある。山も、下の世界も荒れ野。赤茶とも、灰褐色ともいえる世界のなかで、修道院の敷地にみずみずしい緑の木陰があった。

エルサレムの小さな研究所の夏期プログラムに参加。ここを拠点に、地理学的考古学的な現地学習を繰り返した。干からびた川の跡が幾筋も伸びるだけの枯れた土地に古代の廃墟があった。モザイクの床の上にしゃがんで鳥の図柄を眺めた。先生の解説を聞き逃したので、そばに残っていた人にたずねた。なにを表していると言ったのか？ サングラスをした金髪の顔が影のように見下ろして言った。「永遠。」

ダビデが身を隠したエン・ゲディの荒れ野には、洞窟が点在する。その一つに入ったら、意外にも明るかった。ちょうど、天窓から屋内に日が差し込むのに似ていた。自然の天窓を通して、ダビデも空を眺めただろうか。

エリコの町は、聖書のエリコと少し場所が異なる。中東の古代の町は、何層にも積み重なって、今は小高い丘になっているところが多い。そしてそんな町々と同じように、エリコも荒れ野にある。エリコからエルサレムに至る道も。さあ、いっしょに歌おう！ 韓国から来た人が呼びかけた。「ホーリーシティ」（聖都）を歌いながら、城門への坂道を上った。

コロナ危機の時。聖書において「危機」を表すのが、荒れ野です。そこは命が脅かされている場所であると同時に、思いを潜める所であり、誰に命を負っているか、命を担ってくれるのは誰かを知る所、まことの神と共に生きる人生の始まりが与えられる所です。今、世界にひろがるパンデミックの荒れ野は、私たちに「無くてならぬもの」（ルカ 10, 42）に目を向ける機会を提供しています。神の言葉の鏡に映る自分を見だし、信仰と希望と愛に生きること。キリスト者の祈りは、この意味で、困難な状況がつづく歩みの中に、明るい天窓を形成します。